The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の条件表現と時間表現
Author(s)	葉, 懿萱
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49463
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	葉（ヨウ）　懿（イ）　萱（セン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２３２３１　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**日本語の条件表現と時間表現**
論文審査委員	（主査） 教　授　仁田　義雄 （副査） 教　授　小矢野哲夫　　教　授　三原　健一　　教　授　鈴木　　睦 准教授　筒井　佐代

論　文　内　容　の　要　旨

1.本論の目的

本論は、条件表現から時間表現を表す機能へと移行する条件表現形式及び、時間表現から条件表現を表す機能へと移行する時間表現形式について、両形式がどのような状況において相互の表現へと移行するのかを記述し、条件表現と時間表現がどのように関連しあっているのかを明らかにすることを目的とするものである。

条件表現は、「後件（主節）で表される事態の成立が前件（条件節）で表される事態の成立に依存するという二つの事態間の依存関係を表すもの」と定義されるものであり、更に前件と後件との依存関係が一回的か反復的かによって、一回的な未実現の事態を表す「仮定的用法」と一般化された法則を表す「一般的用法」に分かれる。時間表現は、「前件と後件との時間的関係を示す」ことを機能とするものである。一見関係のないように見える両表現には、以下の例（1）～（8）におけるような関連性が観察される。

（1）～（3）に用いられる条件表現形式「ト」と「タラ」は実現済みの事態が前後して発生する時間的継起関係を、（4）は前件が後件の発生する時間を表している。本論では、（1）～（4）に用いられる「ト」、「タラ」を「事実的用法」とする。

（１）アパートに帰ると、なつみは灯をつけ、ヒーターのスイッチを入れた。（『愛し過ぎなくてよかった』内館牧子）
（２）里彩がスタジオのドアを開けて中に｛入ると／入っタラ｝、ロビーの椅子に座っていた日比野が声をかけてきた。（『ルージュ』柳美里）
（３）「あ、星……」なつみが｛指すと／指しタラ｝、洋太郎は一緒になって夜空を見上げた。（『愛し過ぎなくてよかった』内館牧子）
（４）何があるんだろ、と冷蔵庫を開けて｛いたら／いるト｝、「おはようございます」と正彦くんが入ってきた。（『白河夜船』吉本ばなな）

未実現の事態に用いられる条件表現形式は、通常条件表現の「仮定的用法」を表すとされているが、（5）（6）に用いられる条件表現形式「タラ」は、

（５）「いいえ、あたしたちは十和田湖をみ｛たら／テ／テカラ｝、湯瀬へ直行するんです」（『聖少女』倉橋由美子）

（6）「さあ、みんな、雑巾をしぼって、きれいに勝手の横の陽当りに干し｛たら／テ／テカラ｝、遅れないように学校へ行きなさい。」（『あすなろ物語』井上靖）

近い将来に取り掛かる未実現の事態が前後して発生するという時間的継起関係を表しており、時間表現形式「テ」、「テカラ」との置き換えが可能である。本論では、（5）（6）に用いられる「タラ」を「予定的用法」とする。

一方、同時的な発生を表す時間表現形式「トキ」を含む「トキハ」と「トキニハ」では、「前件と後件との時間的関係を示す」という時間表現形式本来の機能と異なる振る舞いを見せる例が観察される。

（7）炭火が一つ挙げられた｛時には／トキハ｝、天候の悪くなる印と見て船を停め、二つ挙げられた｛時には／トキハ｝安全になった印として再び進まねばならぬのだ。（『小さき者へ・生れ出づる悩み』有島武郎）

（8）もし宮が命をとりとめ、本復なさった｛ときには／トキハ｝、尼姿で、人の出入りの多い住居はふさわしくありますまい。（『新源氏物語』田辺聖子）

（7）は前件が発生する度に後件が生起し、同様の事態が反復的に発生することによって、前件と後件の生起が一般化された関係となることを表すため、条件表現の「一般的用法」に当てはまる。（8）はある想定された前提となる事態に対し、それが実現した場合に伴い生起する事態を後件で述べることを表し、条件表現の「仮定的用法」に相当すると考えられる。

最後に、「場合」は条件表現形式や時間表現形式とされていないが、

（9）雪が｛積もった場合／積もると／積もれば｝、駅前の通り道は滑りやすくなる。

（10）字が読めない｛場合／トキ｝は辞書で調べなさい。（森田1988『基礎日本語辞典』例）

で示されるように、条件表現形式や時間表現形式との置き換えが可能である。そのため、本論では「場合」も考察対象に含め、検討を行った。

2.本論の構成と考察形式

本論は、「条件表現から時間表現へ」、「時間表現から条件表現へ」、「『場合』に関する一試論」の三本柱で構成されている。考察を進めるにあたって、以下の形式を用いた。

1.「条件表現から時間表現へ」では、条件表現形式「ト」と「タラ」を考察対象とした。なお、時間表現を表す機能への移行が顕著に見られる「タラ」との比較形式として、時間表現形式「テ」、「テカラ」を用いた。
2.「時間表現から条件表現へ」では、同時的時間関係を表す時間表現形式「トキ」を含む「トキハ」、「トキニハ」を主な考察形式とした。
3.「『場合』に関する一試論」では、「場合」と、その比較対象として条件表現形式「ト」、「バ」を用いた。

3.各章のまとめ

第一章では、本論の目的、条件表現の定義、時間表現の機能、及び本論の考察形式について述べた。

第二章では、条件表現形式でありながら、時間表現を表す機能への移行が顕著に観察される「事実的用法」を表す「ト」と「タラ」、及び「予定的用法」を表す「タラ」を考察形式として取り上げ、検討を行った。

まず、一連の先行研究の研究成果に基づき、「事実的用法」を表す「ト」と「タラ」の用法を前件と後件の意味的関係から、①「連続」、②「反応」、③「発見」、④「時」に分類し、記述を行った。この場合、冒頭で挙げた（2）～（4）で示されるように、「ト」と「タラ」の相互置換が可能なケースが多く見られる。両形式の異なりについては、「ト」には例（1）のような同一主語による意志的動作の連続生起を表す「連続」用法があるのに対し、「タラ」には「連続」用法がないという構文的相違が挙げられる。また、「ト」は単に後件が前件に引き続き生起するという時間関係を表すのに対し、「タラ」は時間関係を表すだけでなく、主語自身の経験を述べるという意味合いを帯びているという意味的相違を指摘できた。

次に、条件表現形式「タラ」の「予定的用法」が成立するには、前件が時間の経過に伴い確実に実現する事態や実現が見込まれている動的事態であること、且つ後件も動的事態であることが構文的要素となることを指摘した。また、「達成の自己制御性」を持つ同一動作主による意志的動作の連続生起と「予定的用法」の成立の関りを示した。

最後に、未実現の事態を表すという共通点を持つ「仮定的用法」と「予定的用法」の意味的特徴と構文的特徴をそれぞれ指摘できたことから、「予定的用法」は「仮定的用法」から区別し、一つの用法として位置づけるべきであることを示した。

第三章では、先ず「タラ」、「テ」、「テカラ」が文中で使用される際の特徴について整理した。次に「タラ」を未実現の事態を表す場合と実現済みの場合に分け、時間表現形式「テ」、「テカラ」との置き換えを通して、条件表現形式「タラ」の時間的継起関係を表す機能を明確にした。

未実現の事態を表す場合、「タラ」は前件の完了・成立が既に予定されているため、後件の展開について述べることを主な機能とし、「テ」は単に前件と後件が継起的に発生することを表す。「テカラ」は前件に引き続き後件が発生することを表し、後件が発生する時間的な起点を示すという機能を担うことに特徴があることを指摘した。

実現済みの事態を表す場合では、「タラ」の後件が変化を捉えることのできる無意志事態であれば、「テ」、「テカラ」との交換が可能である。なお、時間的継起関係から起因の意味合いを読み取れる場合や起因的継起関係を表す場合では、「テカラ」との置き換えは許されず、「テ」との交換のみが可能である。更に、前件が後件の事態を出現させる契機を表す場合、「タラ」のみ使用できることを示した。

第四章では、時間表現から条件表現を表す機能へと移行する時間表現形式について、その現象が多く見られる「トキハ」と「トキニハ」を考察対象として取り上げた。

「トキハ」と「トキニハ」を同一形式として見なすことの不適切さを指摘した上で、両形式が時間表現形式の機能を保持している場合、及び基準時点を示す場合では条件表現を表す機能への移行が発生しないことを指摘した。

「トキハ」、「トキニハ」が条件表現を表す機能へと移行する場合、前件と後件は同一時間帯における〈先行―後続〉関係にあることが要求されることを示した上で、条件表現を表す機能へと移行する「トキハ」と「トキニハ」を「一般的用法」と「仮定的用法」に分けて考察した。「トキハ」、「トキニハ」は「一般的用法」を表す場合、一般化を経たある限定された状況において生起する事態を述べ、状況を限定する役割を担う。「仮定的用法」を表す場合では、生起するか否かが確実ではない未来にある想定された前提において生起する事態について述べることから、前提を提示するという役割を担っていることが分かった。

第五章では、「場合」を用いる節（「場合」節）は時間節を表すものとして位置づけにくいことを指摘し、条件節に位置づけるほうが妥当である理由を述べた。

次に、条件節を表す「場合」について、南不二男（1993）（『現代日本語文法の輪郭』大修館書店）の従属句に対する分類に基づいて検討し、「場合」は形式名詞として働くことを指摘した上で、条件表現形式と同様、B類に属することを明らかにした。更に、同じくB類に属する条件表現形式「ト」、「バ」、「タラ」、「ナラ」と「場合」が文中で併用されるときの接続関係について考察した。「場合」と条件表現形式の併用は大きく、主節が条件表現形式を用いる節に依存し、条件表現形式を用いる節が更に「場合」を用いる節に依存するという「包摂関係」と、状況の列挙を表す「並列関係」に分かれることを示した。

最後に、条件表現の「一般的用法」を表す「場合」と条件表現形式「ト」、「バ」について比較検討を行い、「ト」、「バ」は事態間の依存関係を表すことに重点があり、「場合」は後件事態がどのような状況や場面において発生するのかを提示する役割を担っているという差異を指摘した。

第六章では、第二章から第五章における考察内容をまとめ、本論で残された問題点及び今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨

『日本語の条件表現と時間表現』と題された本博士論文は，主に条件表現を表す形式と主に時間表現を表す形式の，それぞれが表す機能の相互移行を，その条件とともに分析・記述し明らかにしようとしたものである。

条件表現と時間表現とに深い関係があることは，従来からもそれなりに気づかれていた。本論文では，多様な実例を含む的確な用例を豊富に挙げ，きめ細かく丹念に分析・記述を行うことによって，従来，漠然としか指摘されていなかった，条件表現と時間表現との相互関係・相互移行を，それが成立する要件・構文的環境とともに提示することに成功している。

従来からも，「タラ」「ト」が時間表現に移行するないしは両者を併せ持つ，ということはよく言われていた。ただ，それは，「スタジオのドアを開けて中に入ると，ロビーの椅子に座っていた日比野が声をかけてきた。」のような，継起と呼ばれる，前件事象に引き続き後件事象が起こる場合や，「冷蔵庫を開けていたら，正彦くんが入ってきた。」のように，前件事象と後件事象とが同時関係にあり，前件事象が後件事象発生の時間設定を行うような，いずれの事象も実現済みの，いわゆる事実用法と呼ばれる場合が，その中心であった。それに対して，本論文では，(1)「あたしたち十和田湖をみたら，湯瀬に直行するんです。」，(2)「行ったらまず，副頭取が先日来社してくれた，そのお礼を言ってください。」のような，一回的な未実現事態を表す条件形式が時間表現表示へと機能を移行させうることを的確に指摘している。この種の用法は，本論文では予定用法と呼ばれている。前件事象・後件事象が未実現である，ということは，その条件表現表示形式が仮定用法を表すことの重要な要件である。仮定用法を表す要件・特性を有しながら，条件表現ではなく，時間表現の表示にずれていく，予定用法の明確な定立は，従来の研究にはない，本論文の貢献である。前者(1)の例では，「Ｐみたら，Ｑ」は「Ｐみてから，Ｑ」に置き換えられる意味を表しているし，(2)は，「まず」などの時間的順序関係を表す副詞が既に存在しており，前件事象と後件事象が時間的関係で結び付いていることがよく分かろう。さらに，「もし」などの共起が不可であることをも指摘し，時間表現表示への移行を証拠立てている。

また，予定用法が成り立つ要件についても詳しく考察されている。そのような要件として，前件事象も後件事象も動的事象であるということや，事象の同一主体による自己制御性などが取り出されている。事象が動的であることによって，前件事象と後件事象は，ともに時間軸上のその発生点を特定させることになるし，自己制御性を持つことによって，動きの達成まで制御できることになり，動きの達成を見通せることになり，予定用法が成立しやすくなる。

さらに，本論文の優れた点の一つとして，気づかずに置いておかれた言語事実の発見が挙げられる。気づかずに置いておかれた言語事実の発見は，きめ細かく包括的な文法記述・文法研究の基礎にある重要な要件である。優れた文法研究は，言語事実の発見にまず努めなければならない。本論文は，このことを，時間表現へ移行する「タラ」と「テ」「テカラ」との交替可能性や使用のされ方の比較によって行っている。

主に時間表現を表す形式からの条件表現表示への移行については，「トキ」を含む形式，具体的には「トキ」「トキニ」にも触れながら「トキハ」「トキニハ」を中心に，時間表現を表す形式が条件を表すようになる場合について，その状況・要件などを含め，詳しく考察している。そして，「ハ」と時間表現形式の条件表現への移行現象に密接な関係があることを指摘している。ただ，「ハ」を有する形式であれば移行現象が発生するとは限らないことにも触れている。これは，時間表現から条件表現への移行という，自らの考察に積極的に貢献してくれる現象だけでなく，同時に移行が行われがたい場合という，自らの考察にはあまりありがたくない現象にも目配りをする，という分析・記述の健全な姿勢を示している。

そして，「トキ」類からの条件表現表示への移行として，本論文が，一般的用法と呼ぶ「冬型の気圧配置になるときは，日本海側で雪が降る。」というような，前件事象と後件事象の生起が一般化したもの，仮定的用法と名づける「もしあなたが我々の脅威となると

判断したときには，私は躊躇せずあなたを捕まえます。」のような，前件事象の発生が一回的なものの二タイプを取り出し，一般条件と仮定条件に対応させている。

さらに，「場合」については，時間表現形式「トキ」類や条件表現形式「ト・バ・タラ」と交替可能な存在である「場合」を取り上げ，「場合」節と名づけ，場合節が条件節の役割を担っていること，場合節を条件節に位置づけることの妥当性を明らかにしている。「場合」が時間表現表示よりも条件表現表示が主機能であるというのは，用例の偏りなどからしても正しい指摘であろう。また，時間表現としての用法において，実現済み事態においては，「事務所に行った{とき／*場合}，そう言われました」のように，「時」を「場合」に交替できないことが既に指摘されているが，未実現事態でも，「明日ここに来る{とき／*場合}，あの本を持ってきます。」のように，交替できないタイプがあることを指摘している。従来言われていない新しい指摘である。

本論文が扱っている形式は，条件表現では「タラ」が中心であり，時間表現では「トキ」の類および「場合」が中心であった。これらは，時間表現表示へ移行する条件表現形式，条件表現表示へ移行する時間表現形式としては，中心的で代表的なものである。それにしても，この種の考察の対象になる形式には，他のものも存する。そのようなことからすれば，考察の対象は，いま少し広い方がよかったと思われる。

しかしながら，上記のような問題点が存するにしても，本研究の目的は十分達せられており，今後に残された問題が存することは，研究の宿命であり，本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。